文学分野

文学と言語を通してみた
グローバル化の歴史

研究班代表
中務　哲郎

はじめに

中務　哲郎

現在、世界に存在する言語の数は 6000 とも 8000 とも推測されるが、その内、絶滅の惧れのない言語は１割にも満たないという。話者数百人の絶滅危惧言語から使用者を数億から数十億に拡げようとする言語まで、その規模はさまざまである。溯って、古代文明発祥の頃とされる紀元前 3000 年には地球上には幾つの言語があったのであろうか。それらが今日の言語状況に至るまでにはどのような発生と消滅を閲し、あるいは離合集散を重ねてきたかを考えると茫漠たる思いにとらえられる。しかし、少なくとも想像できるのは、いずれの言語も共同体内でのコミュニケーションを円滑に行うために「言語の固有性」を保とうとする反面、できうれば己れの価値を隣接にも及ぼしたいとする「言語の普遍化」への傾向をも備えていたであろう、ということである。このことは言語を介して営まれる文学や、文学を一要素とする文化についても言えるのではないか。こうして、本質的に外へ広がろうとする複数の文化が接触する時、反撥や受容や混淆が起こる。規模は局地的なものから世界大のものまで、古代以来、そのような現象は数限りなく生じてきたが、それらの正確な理解なくしては今日のグローバル化の実体を把握することも、それを正しく導くこともできないであろう。

このような問題意識をもって出発した本研究班は、主にヨーロッパの古代、ルネサンス、近現代を対象として考察を進めてきたが、その過程で、人為的・政策的にグローバル化が行われる場合と、期せずしてそれが起こっている場合とがあることが観察された。本報告書に収載する Engelbert Jorissen, ‘Colonialism, Literature and Identity—Considering Indian Literature in English’ は前者の「文化移植」によるグローバル化を、Elizabeth Craik, ‘Knife and Fire—Medical Practice of East and West’ は後者の「遠隔照応」によるグローバル化の典型的な問題を扱っている。

今回の報告書では主に近現代についての研究報告を収載している。西村論文はウィーン分離派「日本美術特集展」へのバールの批評を通して、近代西洋文明に対する彼の批判的問題意識を探っている。増田論文は、ルソーのフランス語批判・フランス音楽批判が彼の政治思想や国民性の考察に深く関わっていくことを論じる。川島隆は、前世紀転換期のドイツ語圏における、「男らしさ」という性規範の揺らぎと黄禍論の流行との関連を追求し、佐々木茂人は、オーストリア＝ハンガリー帝国治下のディアスポラ・ユダヤ人の経験を、「文化的自治」運動とその言語の位置づけを通して考察している。